

周円・宥宝の和歌補遺

周円・宥宝の和歌またその関係については、『松葉集』(本誌Ⅱ部人文・社会科学第十七卷)及び「宥宝・周円の雨乞いの歌」(愛媛国文と教育第十六号)に紹介した。その後の調査で新たに見出した資料を追加する。

先に今治市史編纂委員会の方々と越智郡朝倉村の無量寺を調査した。同寺には同村庄屋旧武田家の古文書が保存されており、既に歴史関係のものは調査され分類されていたが、雑・未整理の箱の中から多数の和歌資料を発見した。その殆どは武田家七右衛門(号 静山)関係の和歌であったが、周円法師の書簡と和歌、宥宝上人の和歌が含まれていた。

周円法師の書簡は、武田静山宛のもので、年始の祝儀の礼と和歌の上達を賛めている。周円は静山の師であったと思われる。周円の書簡は他にその存在を知らない。

周円の和歌は、冷泉為村の点を付した自筆の遺稿であるとの宥宝の書入れがある。為村から送り返してくる間に周円は没したのであろうか。この歌は『松葉集』には収められていない。

宥宝上人の歌は、安永五年(一七七六)朝倉村の武田静山の死去に際しての追善和歌七首である。静山関係の他の和歌については別に紹介する。宥宝上人の歌集が伝わっていないだけに七首でも貴重であるが、上部が虫食いで読めないのは惜しい。

宥宝上人の実報寺の一樹桜を詠んだ冷泉為村自筆の色紙のあることは知られているが、この度宮内庁書陵部蔵の『片玉後集』九八を調査した時、これとは別に一樹桜を詠んだ為村の和歌があることを発見した。一樹桜を周円法師が為村に紹介した時の様子、桜樹の大きさ、その年などがこれによって判明した。これを証する記事が『蝶鳥日記』(高鴨神社蔵)にあるので、これも掲出しておく。萩園は伊曾乃神社(高鴨神社)にあり、萱庵は越智氏。為村はこれを詠んだ安永三年(一七七四)の七月に六三歳で没している。

また、周円・宥宝が属した石岡八幡宮社中の建てた高角神社に対する為村の詠は既に秋山英一氏が紹介されたが(『愛媛の文化』第十六号)『片玉後集』九八にも一樹桜に続いてこの歌が載っている。

次に、高鴨神社神主鴨重元氏より宥宝上人五十回忌追善和歌の提供

白方 勝

(国文学研究室)

を受けた。重忠の筆写になるところからみて、重忠の主権になると思われる。五十回忌は天保七年（一八三六）である。これによると、宥宝が周円に和歌にその道を伝えたとあり、宥宝が周円の師であったということになる。またこれによって明和、安永期の東予歌壇の伝統と重さが幕末まで及んでいたことがわかる。追善和歌を詠んだ人々の本名等は次の通りである（「ひなのてふり」等による）。

光国 未詳

寛弁 宝寿寺八世上人

春崧 小松藩中 近藤高太郎（篤山）

通侃 黒河氏、多賀村北条の庄屋、俳号石漁、篤山義弟

尚忠 桜井村 村上彦八

政衡 未詳

政徳 今治藩中 岡村大作

真井 松山藩上市村 高水紀伊守

忠行 小松藩 近藤氏

宥泰 実報寺上人

静泉 松山藩福成寺村 武田為輔

通清 国安村 越智有中

重忠 高鴨神社社主

なお翻刻には通用の文字を用い、読みがたい箇所には振り漢字を付した。虫食いなど読めない箇所には□とし、推定可能な文字は補った。

周円法師書簡

朝倉

武田静山様

梅柳軒

周円

小松より

如仰春陽之御吉慶

重畳目出度申納候弥

御安栄被成御迎陽之条奉

目出珍重候小子無異二加年

仕候乍慮外御安清可被下候

然は為年始御祝儀白銀

一封之至貴意遠方御心遣候

段不浅忝祝納仕候將又

御出詠拜見申上候処些扱々

驚人候御上達殊更御出精候

段不浅奉存候追々無御油

断御詠出可被成候何れ近々

之内罷出寛々得貴意

何角御物語御礼に可

申上候乍慮外七右衛門様へも

宜奉頼候御賀之趣忝

承知仕候猶万喜期永春

之時候恐惶謹言

梅柳軒

二月朔日

周円

武田静山様

貴机下

再啓余寒随分と御自愛

可被成候何事も近々

可得貴意候 以上

如仰春陽之御吉慶

重畳目出度申納候弥

御安栄被成御迎陽之条奉

目出珍重候小子無異二加年

仕候乍慮外御安清可被下候

然は為年始御祝儀白銀

一封之至貴意遠方御心遣候

段不浅忝祝納仕候將又

御出詠拜見申上候処些扱々

驚人候御上達殊更御出精候

段不浅奉存候追々無御油

断御詠出可被成候何れ近々

之内罷出寛々得貴意

冷泉為村卿御点詠草入

周円師自筆

周円遺稿 宥宝

筆

○濟

九月十三夜

九月十三夜 信之山家にて宗匠家の尊詠を拝し奉るに いつはあれと月の秋の夜こゝろすむすまゐしつけき山中の庵 と遊はさせられしを 折にあひていとありかたさのあまり おそれみをかへりみす 尊詠の御句を一首くのうちによみ入て志をのへ侍る

いつはあれとひよひをわきて長月の名にあふ空にてりまさる影
長月の月の秋の夜すみまさるのきのまつ風松むしの声
秋の夜の更ほ猶更こゝろすむこの山かけの月のした庵
さし入る影も身にしむ秋の月すまるしつけき草のとほそに
岩くゝる谷のなかれのをとなむも月にすみそふ山中の庵

何もおもしろく候

峯 月

夕ぐれの雲はしつみて半天のたかねを出る月のさやけき
半天にたかくそひへてすむ月のみなみにむかふ伊与の大嶽

杜 月

陰たかき木間を杜の下露にうつろふ月の影そさやけき
もみちせぬときはの秋もてりまさる月のかつらに秋を見すらし

海辺月

周円・宥宝の和歌補遺

遠近の浦の見るめもさやかにて月にはれたる秋の海つら

うら浪のよるをわすれて海士人も月にうかる、沖のつり船

山家月

岩つたふかけひの水にうつろひてしつかにすめる軒の月かけ
あかす見ん秋のよるくしつかにもすめる軒はの山の月かけ

月前歎

庵さす外山の風さよ更て月影さむみ男鹿なくなり

長月のあかつきかけてつれもなきつま、つ鹿の音をやなくらん

月照紅葉

いくしほかそめし梢に秋の夜の月もてりそふ庭のもみちは
そめまさる梢の紅葉見えすきて影もてりそふ秋の夜の月

宥宝の静山追悼歌

静山入道世をはやふし給ひて七々日
とふらふころ追善にもなりねかしと
に功德のいちしるしきあひらうむ兄
子をわかち歌ことのはしめにをきて
ことの葉をつゝり法蓮に送るものならし

宥 宝

言はの花をなき人のかたみになしてしのふおもかけ
におもひみたれて玉の緒の絶にし人をしたふはかなさ
くはちすの花の上に露ときえにし身をややとさん
き身をしうけすは法に入道のをしへもいかてきかまし
をしるへに行かたはたのむ仏の御国なるらし
へは跡とひよりてことの葉の花の手向と数つもるらし
へきつみもなければ後の世は花の蓮の南無阿弥陀仏

〔宥坐上人五十回忌手向和歌〕

五条の三位(後改)の和歌は無常にして寂滅の理にひとし 是た小倉の黄門(定基)は
 天台の止観こそ和歌工夫の至極なりとのたまひし也 しからは仏の道
 と和歌の道は同じことほりにやあらんすらん 実報寺の中興宥坐上人
 は法の道に妙なる大とこ(徳)なりしか 高野山のさやけき月に心を澄しま
 た都の冷なる泉に口す、きし(冷泉巻)みすほうのいとまには和歌を詠して心を
 なくさめ 近きあたりの十あまり三ツ四ツの朋友をむすひ 此国に言
 葉の種をまき置給へり 夫や(それ)まと歌をまなはん人はその心ひたふるにす
 くよかに返りて 霞をあはれみ露をかなしむあまりやをし花鳥のなさ
 けもしるらんとおもほゆ いさをし光明真言もおさく立おとらんや
 はとて あやしの山賊むくつけなき柴(ツ)ふる人の文かく事もしらぬかき
 りまでゆくりなく近づけ 和けく口すさませてかたはらいなきを(師連)もみふ
 てもてかいつけやり給ひ また片輪なる女はらいわけなきわらはへの
 我らまでねもころに歌の道にもなひ教給ひぬるはいともかしこし
 しかして法のわきは宥天上人に譲り和歌の道は周円法師に伝へ給ひし
 後 み寺の東なる片岡かけに庵引結ひて行すまし数年を送り 天明七
 ツのとし丁未のほとと云に寂を示し給ひぬ 今年五十年の星回り来ぬ
 れは今の山主の僧正また法師たちまかりつかうまつりて土砂(師通)のみ講す
 し給ひければ その本堂の前なる一樹さくら秋しり顔にめてたく咲開
 ぬるは 波のたか子と聞え給ひしきさいの宮うせ給ひし御業安祥寺に
 てしけるころ 人々奉りあつめたるさ、け物干さ、けはかり木の枝に
 つけて奉りければ 馬のかみなる翁 山(翁)のみなう(移)つりてこ、に逢事は
 とよめりしは造りし花なり こは上人のしたしく愛給ひし一樹桜の花
 にはゑやは及はぬ事とおもほゆ 僧正の師上人のみ門はとしふりても
 立入し越智通清武田静泉に命してけふのみわさを題して人く(歌奉)に歌奉
 らせよとありしかは 寄道述懐と云私題して人々にか、つらひ侍るに

みな同じ心のみあと、ふらふ歌送りこし給ふを(書き)かいつけて御講のみ前
 にさ、く

宥坐上人五十回忌手向和歌

寄道述懐

月花をみるにつけても言の葉のみちしる人のむかしをぞ思ふ 光国
 道芝に置ぬはかりの露の身をたのむは何のこ、ろなるらん 覚弁
 あふきつ、見れ共うときふみの道ふみわけせめし人の心を 春松
 敷嶋の道しある世になからへてはなの一樹はとふへかりけり 通侃
 春秋もむなしくすきぬ敷嶋のみちをとふへき人もなくして 尚忠
 しらぬ世の人もなつかしことのはの道にさきたつ余波したひて 政衡
 敷嶋の道のしるへとしたふそよすきにし人の水くきの跡 政徳
 しほりせし君あらませは問てましおくれてたどる敷嶋の道 真井
 ちりのこる言はを道のしるへにてみぬ世の人の跡やとはまし 忠行
 手向していますかことく思ふ哉道しるへせし人のむかしを 宥泰
 言の葉の道の恵みを在し世のむかしを思ふ袖の露けさ 静泉
 しほりせし言はの道をいそし経て見し世忍ふは我ならて誰ぞ 通清
 敷嶋の道をあふけは榮えつ、あな尽せし言の葉草や 重忠

片玉後集九八

冷泉入道正二位前大納言為村卿御染筆花記一卷

一樹さくら

伊予国なる門人周円法師花の比しも都にのほりこなたに來り よもの
 桜の事なとかたりあふつるて おなし国桑村郡実報寺の本堂の庭桜は
 その国にもたくひなし 名高かき一木にていつの世いかなる人のうへ
 しともしらぬふる木 としにさかえて東西十三間四尺 南北十一間三

尺 梢のたかさ三丈あまり 木のめぐり一丈五尺四寸 うつし系にしてみせ侍る 海山をへたて、みる事いとめつらし これも言はの花の陰ひろき契とおもふ 花の比はふりつむ雪の山かとたどられ 枝たかければ空にしらぬ花のふ、き庭にあまり かすおほみなとかたる一本桜みぬ盛も此うつし系にむかへは木陰の心地ぞせし 此絵をかみにをき むすひ句ことに一もと、いふ事をならふ 寺のぬし有宝もこなたの門人なれば此一軸をつとにせよと周円によす

止静隠老澄覚

しろたへの花をみきりの山桜山としたかくかすむ一もと
つきうつる木末の花の枝ひろく下陰くれぬ庭の一もと
ほかにまたたくひもきかす陰たかく千枝さしおほふ花の一もと
うちとなくよもに枝さす庭桜かけひろき花のほふ一もと
しのたにもこえていく千枝もりふかき雪のよそめの桜一もと

よその千もとを一本桜とやいはむ

安永三年弥生都の花盛に伊予国の春をしるす

同御懷紙

伊予国実報寺の一木さくらを

洛北隠老澄覚

庭のよもにさすえたひろき花さくらよその千本を一もとのほる

三月十八日門人伊予国の僧周円法師のそみて高角社といふ四字を書てけふ神影前にこゝろさしをのふ

入道前大納言澄覚

たかき名も春かさねきて日本の花のところはみよしの、山
かけつ、く花はいくもとよしの山桜にかすむ峯の白雪
つねよりも春は桜におくふかきいくへの雲をみよしの、山

のほりきて見かへすかたも行ききもよしのは花の雲の下みち
のこりなく花さく春のよしの山麓は雪におくはしら雲
しらくものよそめくもらて朝日影花にさしそふみよしの、山
むかしよりまかふよそめは雲いくへ花にかさなる山はみよしの
しらゆふはけふの花のえ雲とみしよしの、春をかくる手向に
やまさくらよしの、雲にあふく名も春をかさねて高角の宮

蝶鳥日記

いさとして立出るに 真井おくりすとて実報寺まで来ぬ 庭に桜咲
たり 此桜はやことなきかたの

庭のよもにさす枝広き花さくらよその千本を一本の春

と詠せ玉ひてより一本桜の名字おひたるか 其御記に 東西十三
間四尺 南北十一間三尺 高廿三丈余り 廻り壹丈五尺四寸と書
せ玉へり さるを今は枝かれ幹さへに其時の姿ならずとん 若
木二本植そへたるか栄ゆる枝さし 古木の昔に似たりといふ 時
の移るもしらす酒のみす 萱庵か云 かく三人か円るせしことは
三十年近くへたゝりたるを 此木の桜の蔭に寄つとへる事のあや
しき

一もとの今はみもとにわかれてもひとしき色を花にとは、や
名に高き色をわすれず咲花の世に古寺の庭の桜木
盃の数さへまして名に高き一本桜を三木とカタらん 萩園
花見ても老は涙にかすまれてこゝろのゆかぬ別をそする 萱庵
鳥にさへよひかへさるゝ心ちして又たちもとる花の木のもと 萩園

末筆ながら資料を提供いただいた方々に厚く感謝申し上げます。